

高野記

027
559
/

027
559
1

愛知女專
第11847號
圖書

九二四

大正

序

今や上々侯伯より下漢樵にあよふ
 まて俳諧きぶものなりしをいし中に
 一家をもて世に松きらむことハニハ
 めてこころし京根の際三四指を屈す。
 たくもやと守そむし三四者ちと誰
 ル主サ大指を領ちりまそくそ
 巴人菴乃門と抱いてその自天卒に

其書影

倣ふともくからば時菴の徒平
ためて其聲守に化せられすをり
俗談平活をもしたるに女情沈
盡きもしたる小説の奇可なることハ
諸史乃めてたつたよりも真ある
ことしま去りて又まなるもの出し
人或まぬし人情世態乃たうん
句は得んハ則ちま流ことハ、

あて一家の論畫めこと十三回
其子ル董小冊子を編て又の魂を
繋むせ乃追善集つくれるまや
りりてあねららゆやま月蓮の句は
もとあすむに異花酔月の吟こと
拾ふ魚肉蘋蘩雜俎して供する
れりて全曰さハし又又り意じ
の闇室にこそせやしいとまやた

手会珠をたぬし守格名こころしく
尼法師よひ侍てあやしく着ふる此
たんよりと雞骨床成支元いと老
うらみかけ眼くらくなまきるかたはろ
もろふし此識者ハふし侍り此董之
此女扇其幾乎

明和壬辰秋夜半具其燕対書

むりー父の世も吐ー附句箋計
其のゆゑも世乃をりも情を探れ鳥
乃れひー下姿をんむる句こも集
今たし百句を並て百韻も綴れりて
一字一頁乃私をしまり所の中よ
出せる
あやまらばはらるるをてまも乃れ
合
一巻の書化も覚束なりすいて有心會釈
乃法も皆あり七名八体ありて論

わが叶まはてたかことふ竹をまきし本は随
ろつと成（し）ちりおまきと折るも終
端よりとるも余り句を繋ぎしと前好む抱
月花乃足はるも門流の人（し）は後
て一巻の首尾をあらひり十三回の追
福と（し）且知毫乃佐好士（し）披露し
信（し）ものあり

高子舎儿董也

雪（し）あつ（し）し海（し）は松乃曲
先人（し）主
その雪（し）ひ（し）古（し）を（し）見（し）董
お（し）し（し）人（し）を（し）皆（し）相（し）只（し）な（し）て（し）
さん（し）と（し）強（し）し（し）や（し）そ（し）乃（し）田（し）樂（し）主
雨（し）も（し）又（し）あ（し）つ（し）の（し）の（し）あ（し）り
この町（し）筋（し）乃（し）れ（し）れ（し）旅（し）り
新（し）月（し）又（し）せ（し）し（し）初（し）ね（し）の（し）あ（し）れ
驚（し）て（し）も（し）次（し）下（し）秋（し）かり（し）り（し）ふ

刺精の塩冷し結ゆて 董
冀みわししりあハ 朔 主
忘れと甚なぐれまを地
連て 走るをわんせしあ
物喰わハひらき成らるれ 董
発起しし日は死すまいのみ 主
異気中ちとまの山ありし
廣子し極るる居るも力入 董

大船乃鼻の由ある那の月 主
赤あ方乃新米て 董
僧脱のやまのろとといふい 董
上下礼ハ袴 欲
備りや酒ふるるとは乃以 青眠
春あをしと菜種をよ 董
水新成に帷子あつとゆき遠 董
高しつゆし 澗ハ水やある 董

床と申して居ると方便も下り
柱折（葵乃出まゝ家知の董
橋戸より行脚と連の精霊打 主
小便満して階とせせいは
かもの芭蕉乃ぬの華羽織
言の月の乃沈のほるりを 為松
嵩より躍る成乃たむと 主
拵し草履のけしと 下座

拍掌に酒流乃飲のかまゝ撮
納不むとくハ巾着入り
後亭し帯ハ枕しとてりて
恠氣乃順氣友吐の介抱
引おとめ巨魁なるる炭りり 董
りてくくく雨りぬ出に
新泰ハ旦那の蔵へ通て去 主
又追立保家ノ藤あやの

木松の傍より巻く文
通さん辨慶のやほ矢り也
袖摺し律を調ふる琴のいと董
何れを以て養て晴陰 圭
月乃舟葦の上より 墨ころも
わ島り雲のやほやうぶ 董
見れば谷の中より一里くさ 圭
春のやうに大蛇辺の新建

襲乃踏むとく几巾着て
思をりしるも代をれし
殺る艘三系大坂乃一人通
湯屋いひやる出山乃紙伽
明星や曉起の脚を空 董
荷を丸ちけ指さふはく 董
ごうごう子寶にかゝる
い下梅摩し尻をこらせよ

歌もく今道成るるあはれとけ
 月夜も閑も意乃その中百歩
 氣母も去りけははるは草を主
 秋もあつれを添ふむは女董
 さうき色半分刺て悔さけ
 程しと澄る茶椀うさふ
 湖をさつ泉水もささるは
 猿船二艘廊よりささふ

香伎はくあふの夜駕をさふ
 遙梓の序鶴乃あく
 ありや在りてさし花乃雪子
 實其以乃春のさ
 李林

遺句七十四句 八董十八句

子夏 鳥根
 青映 百步
 孤舟 牙川
 斗湖 李林
 各一句

好人乃のあはるる乃のあはるる
飄々酒や春風春水
よもよも小船南の此窓に
くつあはるる乃のあはるる
備尺も草の巻は乃のあはるる
白洲のまゝく垣のあはるる
小童

や寒が乃のあはるる乃のあはるる
極りて追て恋とあはるる乃のあはるる
又上乃のあはるる乃のあはるる
勝ものあはるる乃のあはるる
蛭子海は乃のあはるる乃のあはるる
月を乃のあはるる乃のあはるる
先陣ハ二ハ足ぬ美少人
浪も伏見墨路の里

門徒流ひとらわは法不
きい縁者又隣をりれ
開りいりし年か捨ハ花輕
四季かりしハ疝氣す白
追はまじり威勢をとりて
廓ありしハ 慢山ありし
ほやみんりまの後の立時
今捨りてハ是生滅法

小使のいしし山ありし
そ葉乃露りしとち雁瘡
あきさしいし月夜のひ色
秋りしハ拒焚周棠
怪石を九十九峰ありし
黄化厚衣ハ障子百枚
棕も枯れりしと鳥
去りの長じしとありし

のり〜旦親の力り駕よいし
新黄乃こゝろのあまのこゝろ安んぢ
長治郎乃赤穂物をもつたよ
旅宿のりも井はあつても打
立のり〜都の花のそ井より
ひり〜いも原西の藤り

子曳

おり〜乃泣きあり柿の花
隣つ〜きこ又茂は生垣に董
あき〜人乃なき絹買は道より
あか〜あ〜も〜版の相伴曳
御坐船乃焚あらしを月いさう、
り〜この隅にうすよいの毒 董

負後不痛力乃故下をいりて居董
藏物いりも足也勅定曳
三日と廓をたてて遊あそ
心いとくや 悪ふ占りし
此をいこら乃椿も咲そあそ
ふ張の綴ひつもあらし
長尻り惜りまふし物まきり
翌乃年忌の佛参らそ
曳董

臈こかりいとりの天氣そ
笠の内をの 瓶乃 初花 曳
出りりも惜 おしむ可む家には
祇園 清水をのいそ京 曳
此にの宗盛殿をのいゆ
梨り 似名 二谷 半平 董
賑とこの間を禪をのいそ
盟乃水をりける 石 昔 董

狗のあしととも拾われぬ
供もせぬ日ハ朱春しゆる
ちりしと雪のあつりハツたり
好乃たあつやとせとあま
生酔の鳥のけしと蛇の糸
りりしとやをさし是見と
よとせとて月も恨る場の鳥
うら松ありと葬ハさく董

ゆくとと鶏のま疵を隣と董
庄屋り息子のゆと十八曳
字尻ハあまゆと倉乃白ゆと董
草のゆと水氣とらゆと曳
枝まきと松をむりの花と董
葉をちゆ鳥乃皆のせと目
掘業

欠して月もあつ成夜寒の 燕村
祀老のりさの 謡 一番 八董
やう海 餘 醜 渡 賣も 心 多し 竹 護
遠く 高く 遠く 遠く 村
鳥 風 小 水 主 鳥 帽 子 多 多 多 董
日 花 也 扇 小 ち ぐ こと 多 多 多 護

宛 表 の こ の 多 し 惟 よ 友 多 葉 村
萬 多 あり 帽 也 小 多 し こと 多 董
遠 多 多 の 多 多 多 多 多 多 惟 然 坊 護
よ い 舞 礼 平 大 洋 八 町 村
お 免 乃 七 三 也 多 礼 夕 多 村
あ 多 衣 濃 濃 波 の 多 多 後
恋 多 の 多 多 多 多 多 多 多 多 村
と 多 火 波 多 多 多 多 多 多 多 董

物々々々鳥も花もあはれあはれ
獨活の苦も大和の三壺
用の花も入るゝ乃見ゝ如之
痘瘡神丸の如きも
士佐弱の光輝く鞆
五日の風の如く
かたや干骨
書記も典句も
護

狸といふつとも又暮を冊
力ハ人笑乃ととも
一葵とすれ如家を憐く
忠奇とた西海蓋乃哀
川く水も月浪も
第良村の中庵を追ふ
弘安の和尚の疝氣持
川の樹り二人
護

長家中 登坂時と成りし
修しきとて仕舞ハ為 董
煥ハも男乃 孫也ハ 藤ころも 護
今ハ 孫也を 捨也 大音 打
花二代中ころを 香の 故ころハ 馬南
すくふ 流よころ 葉川 菅 執筆

此又十三回懐旧

うつゝ火の

曉 空をよみしりし

明和壬辰之紀

小子高儿董并書

かたはるのまじり

宗河

邦云

山とては孫のむすこ

几玉

かたはる

右夏冬二紙両筆の及古ハ葛子舎乃
匣中ニ藏ル也今追善の後に録

洛書林橋屋治兵衛様

